

西南学院大学 図書館報

「君の脳にスパイスはいりませんか？」…武井俊詳	2
卒論作成上の留意点……………伊藤治夫	3
気楽に読める専門書〈8〉……………松永祐二	4
図書館事務次長就任にあたって…堤 義男	5
昭和62年度図書館各種統計……………	6
お知らせ・報告……………	8
〈付録〉昭和63年度指定図書目録	



演習と図書館

法学部教授 高橋 貞夫

高学年を対象とする演習は専門的知識をもとにその高度化、応用化をねらいとし、参加者の報告、討論を通して展開され、しかも大学生活のまとめとしての意義をもつものである。ところで最近これが必ずしも活潑とは言えない感がある。仄聞するところこのことは私だけのことではないらしいのである。理由としては参加者19名では個別的指導が行き届かないこと、1時間半の授業時間では議論を展開させるのに短か過ぎることなどが考えられる。このため合宿を行うのであるが満足すべき成果が得られたとは言いがたい。低調となる大きな理由には参加者の準備不足があるように思われる。そこで演習の準備と図書館の活用について一言してみよう。

今期のテーマは「労働基準法改正と最近の労使関係における問題点」である。労基法が40年ぶりに大改正され、本年4月1日から施行されたことに注目し、しかも内容が労働時間法制であるから極めて時宜に適したものである。関係法令の整備は本年1月に完了し、これに伴って多くの出版物も刊行され、早速発注したのであるが、残念ながら図書館で学生諸君が利用することが殆んど出来ないまま演習も終わろうとしている。最新の問題をしかも学期に合わせてとりあげるとすれば、それに必要な新刊書の整理には何らかの配慮が出来ないものであろうか。

実定法の演習では判例が不可欠である。是非

判例集を丹念に当たってもらいたい。しかし判例集を探し出して調べることは大変手間のかかることであり、このため閲覧係の手を煩わせることも多いと思う。これを少しでも簡便にするためにせめて代表的な判例集の索引の複本は開架として用意することは考えられないだろうか。

開架図書のなかには内容が古く学生の自習に適さないものも相当ある。先生方の協力を得て適宜整理することも開架式の機能を一段と高めることに役立つのではなかろうか。

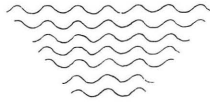
学生が図書館で演習の準備をしていれば当然議論に発展していくこともある。図書館が読書の場所とのみ考えるのは十分ではない。閲覧室とは遮断された討議室（共同研究室）といったものがあってもよいのではなかろうか。ここから新しい問題意識や発想が生まれ、次の準備へと進んでいく。休憩室が読書の疲れをいやす場とすれば、討議室は次の読書に発展していく場である。図書館が増築される機会に実現してもらいたい。

演習のための徹底した準備は当然その活性化のための原動力となるばかりでなく、これによって養われるデーター的的確な収集・整理・活用力は情報化社会に生きる若者にとって優れた資質となる。図書館は大いに活用されるべきであり、活用しやすく工夫されるべきである。

（たかはし さだお：労働法）



「君の脳にスパイスはいりませんか？」



文学部助教授 武井俊詳

本を読むって何だろう。この冊子を手に取り読み始めた方或いは読んでみようと思っている人は、多分その何たるかに一家言をお持ちだろう。

スポーツ新聞を読むって何だろうか。それは前の晩球場でテレビで観た最良チームのあの選手のあの場面のあのホームランあのファインプレー、エースが敵の4番打者を三振させゲームセットになった瞬間のあの興奮・感激・快感を反芻し増幅させるのだ。本についても、既に持っている感情・思想・知識を確認し強化させる読み物読み方がある。

しかし、読書には、本との出会いには、未知のスパイスを口にした時のような爽快な刺激があることもあれば、それまで裸眼でしか見たことがなかった水中をゴーグルを着けて眺めた時のような明晰な世界を実感できる場合もある。また時には、それまで宛ら互いに無関係に浮遊していた断片的知識を、本が触媒となって整然とした知識体系に合成してくれる。一方、それまで自明と思い込んでいた「公理」が浅知恵の独断で偏見に過ぎないと喝破されることもある。

私にとって知的スパイスは例えば佐藤信夫の『記号人間』であり毛利可信の『意味論から見た英文法』、郡司利男の『言語と文化』だった。佐藤はレトリックの痛快さを、毛利はそれまで無味同然だった英文法が斯くも面白く味わい深いかを再認識させてくれたし、郡司は言葉遊びと文学・文化の関係を香ばしく語ってくれた。

『世界が見える日本が見える』というゴーグルを着けてくれたのは大前研一だし、辻邦生は

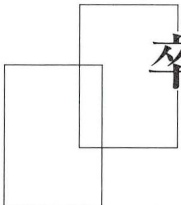
『安土往還記』で1人のポルトガル人の目から信長とその時代を覗く新しいアングルをもたらした。

百首の寄せ集めの和歌集「百人一首」が何故「百人百首」でないのか？ 撰者定家がこれを編んだ壮大な意図は？ それまでそんな事を一顧だにしなかったが、織田正吉は『絢爛たる暗号』で定家の深慮遠謀の体系を明示して見せた。また、事件と年代の組合せの縦系だけだった「歴史」に対する漠とした印象を、「日本人」という横糸を用いて渡辺昇一流の織り方で見事に綾なした『日本史から見た日本人』がある。松本清張の『火の回路』を読んで、酒船石など巨石遺跡の探訪に突き動かされもした。

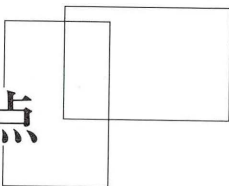
母国・母語とは生まれて此の方数十年間慣れ親しんでいる故、半ば自明と思い込んでいた「常識」の中に、いかに「非常識」があるか指摘した『おもしろ比較文化考』を書いたロビン・ギルに鬼才を感じた。デーブ・スペクターの『文明退化の音がする』には何度も膝を打った。日本人のマナーの悪さ、一流ホテルのオソマツなどを標的に彼の機知に富んだ辛辣な皮肉は次々と正鵠を射て小気味良かった。と同時に憂国の士気取りにもさせてくれた。

さあ、夏休み。君の脳にスパイスはいりませんか？ 君の眼に張り付いた鱗を除去してみませんか？ 或いは心の洗濯を文学で。手始めにマーク・ピーターセンの『日本人の英語』あたりどうでしょう。生協で割引で、図書館は無料。

(たけい たかよし：実務英語)



卒論作成上の留意点



経済学部助教授 伊 藤 治 夫

卒論のまとめが目前に迫った4年生はその作成に追われていると思うが、まさに「光陰矢の如し」、有るようで無いのが時間、くれぐれも土壇場で時間切れのやつつけ仕事となることのないよう時間配分には十分留意してほしい。短いレポートを短距離競争にたとえるなら、まとまった卒論等はさしずめ「マラソン」と言っても過言ではなく、長期戦を要する。そこで以下、卒論作成上の留意点など紙数の許すかぎり述べてみよう。

まずテーマの選定と資料収集等についてはすでに諸先生からの適切なアドバイスが本誌で紹介されているので(本誌No.112、No.108など)、繰り返さないが、あえて一、二付言すれば、テーマの設定、掘り下げの際には、自分の専門・関心事と問題の重要性等を尊重し、「何故」、「どうなる」といった問題意識を念頭に置き、指導教官のアドバイスに耳を傾けてほしい。

テーマが決まったらまずスケルトン(骨組み)を考える。つまりその論文をどういう項目順にまとめてゆくかというごく大雑把な(4~10項目位)、いわば章づくりである。その際「起承転結」が基本原則となる。すなわち特殊な場合を除いて、まず序文等で問題提起、問題の所在等を簡潔に提示し(起)、それをうけて以下本論となるが、例えば事実、観察等を論じ(承)、転じて分析、論証等を記述する(転)のが典型的形式であろうが、とくに承・転の中味はケース・バイ・ケースでよいと思う。最後はいうま

でもなく「まとめ」、「結論」となるが(結)、これも「序」と同様冗長でない方がよい。というのもすでに承・転の各章で現状分析・論証などが詳述されているはずだからである。起・承・転・結いずれもそれぞれの重要性があることはいうまでもないが、なかでも最後の締め括り(結)がしっかりしないと、何を言わんとしているのかがわからず、読者への印象を害するという点で「まとめ」はしっかり結びたい。その意味ではテーマの設定、スケルトン作成の段階から何を言おうとするのかという一応の方向づけは設定しておきたい。むろん資料の過不足、分析結果などによってその筋立てが変ることもあるが、修正・改良しながら完成していく。

執筆の順序は、必ずしも理想どおりの起・承・転・結に従った章の順序で書き進める必要はなく、基本的大枠のイメージさえ頭にあれば、「起」を最後に書くこともありえよう。むしろ書きやすい部分から筆を進めるのも一つの方法である。とくに筆が進まない時はそれも必要で、時間と労力と頭脳との勝負である以上、いつまでも「無」であることは許されず、執筆段階ではまず原稿用紙に向かうこと、1行でも、1枚でも字を埋めるよう心掛けたい。不完全でも推敲は後でできる。ちなみに筆者の卒論は“*Readings in Monetary Theory*”の共訳であったが、夏休みに汗をふきふき辞書と苦闘した思い出がなつかしい。

(いとう はるお：資源貿易論)

気楽に読める専門書 <8>

『これからの教育を読む
臨教審前と臨教審後』

労働旬報社 1987年

文学部児童教育学科主任 松 永 裕 二

現在、我が国では、臨教審答申（第4次の最終答申は1987年8月）に基づいて、行政レベルで答申を具体化するための諸施策（学校教育法の一部改正など）が採られつつある。しかし、では、教育現場（児童生徒・教師・父兄）が抱え込んでいる様々な諸問題は、臨教審を契機として抜本的に解決されつつあるのかという点になると、どうもよくわからない、実感が湧かないというのが学生諸君を含めた大多数の日本人の平均的な感想であろう。教育改革の行方を知りたいと誰もが思っている。本書は、そのような読者に一つの手掛りを与えるものである。

本書では、「国際化」と教育を巡る問題、能力開発と生涯学習社会、生活の変化と道德・人間像、学校教育、入試・選抜制度、高等教育、差別化と流動化へー教員政策の新段階、といった課題がとりあげられているが、本書は、次のような特徴を有している。

まず、第一に、過去15年を1つの歴史的時代としてとらえ、我が国で進行中の経済・政治・文化にまたがる変動を視野に入れて、教育の諸問題が検討されていること。第二に、実際に比較研究はなされていないが、我が国の教育改革をグローバルな視点から見るという態度が一貫してあること。ちなみに、米ソでも現在、教育改革が意欲的に進められている。「生活の変化」、「学習社会の到来」、「国際化」といった問題

は、日・米・ソにとって共通の課題であろう。第三に、各章ごとに関連のデータ・資料を豊富に用意するなどして、読者の理解を助ける工夫がなされていること。掲載の資料は、全部で150余に達している。

本書が取りあげた課題は、そのいずれもが今日の荒廃した教育状況を打破するうえで十分に検討しなければならないものばかりである。本書における諸課題の分析は明晰で、問題点の指摘も概して正鵠を射ている。検討課題は多岐に亘っているが、関心のある課題（章）だけ読むという読み方も可能である。例えば、第7章「差別化と流動化へー教員政策の新段階」では、臨教審答申の大きな目玉である「初任者研修制度（新任教員に、採用後1年間、ベテラン指導員の指導と教育センターでの研修を受けさせる制度）」が批判的に検討されている。この章を読むだけでも、臨教審路線の本質を垣間見ることができよう。しかしながら、本書は、「臨教審後」の教育改革を国民の手で具体的にどう進めていけばよいのかという点になるといささか歯切れが悪く、精彩を欠くように思われる。とはいえ、本書は、教育問題の入門的専門書として十分に推薦に足る読み物である。教職志望の有無を問わず、学生諸君の多くが一読されんことを期待している。

(まつなが ゆうじ：文学部助教授・教育原理)

図書館事務次長

就 任 に あ た っ て

堤 義 男

およそ15年もの長きにわたって学生部に籍を置き、この4月の異動で大学図書館へ配置され、それこそ未知の世界へ足を踏み入れた心境で、何かと戸惑いも多く、不安と緊張の毎日である。

『学生相手から今度は本が相手では気持ちの切替えが大変でしょう』と妙に労わりとも励ましともつかない言葉をかけてくださる方もあるが、それはそれとして、組織の一員である限り当然のことで、たとえ相手が変わったとしても、課せられた責を果すには未知へのチャレンジもまた必要なのかも知れない。

しかし、そうは思いながらも、やはり学生の頃を含めて、それほど頻繁に図書館通いをした部類の人間でもなく、本当に大丈夫なのか、また最近の図書館界の状況はどのようなものであるのかを考えれば考えるほど不安はますますつのるばかりであった。

前任者の刀根次長から引継事項として、本学図書館の現状や問題点、運用にかかわる様々な留意点、業務の電算化、増改築の計画推進など、これまでの経験に基づく貴重なご助言をいただき、臆げながらも図書館の内面に触れ得たことは感謝であった。

そうした心境のうちに就任して間もなく、久びさに館内を巡回して、さすがは図書館であると驚嘆せしめたものは資料の豊富なことだった。例えば、図書館に関する資料だけでも、図書館学といった専門書をはじめ、基準、要項など、数多くの参考図書や各種の情報誌がみごとに収集整理されており、必要に応じてそれを容易に利用することができるという利便さがあり、それこそ図書館の図書館たる所以であろうかと感

心させられたものである。

大学図書館の基準によれば、図書館は、大学の研究・教育に必要な資料を収集、管理し、利用者である学生や研究者などの要求に対して、これを効果的に提供するというもので、そのためには、脱漏のない資料の収集に努め、閲覧、貸出、参考調査その他のサービス業務によって利用者からの要求に迅速、的確な対応が必要とされている。

本学図書館においても、こうした機能を十分に発揮させるためには、未だいろいろな問題が残されているようであり、更に多くの改善が望まれるところである。

大量化、多様化する資料の中から、効率的な収集と管理を行い、利用者の要求に応じた迅速、適正な処理や各種の学術情報検索サービスの提供など、それに対応するには図書館業務の機械化は最早必須の条件とさえいわれている。幸いにも、本学図書館の電算化については、ここ数年来、検討が進められ、近く実現の見込みで大きな期待を寄せている。

また、これと並行して、久しく待ち望まれていた図書館増改築についても、過日委員会が発足し、いよいよ具体的な検討が始められている。

最近の大学図書館は、機能的にもまた設備や外観においてもすぐれたものが多く、本学の場合も是非あやかりたいと願っている。

図書館の前を通る学生が、何気なく立寄ってみたくするような、そして学生の知的欲求をかき立てるようなそういう魅力のある大学図書館にしたいものである。

(つつみ よしお：図書館事務次長)

昭和62年度 図書館各種統計

●どんな内容のものがどれだけ増加したか。

○図 書

(単位:冊)

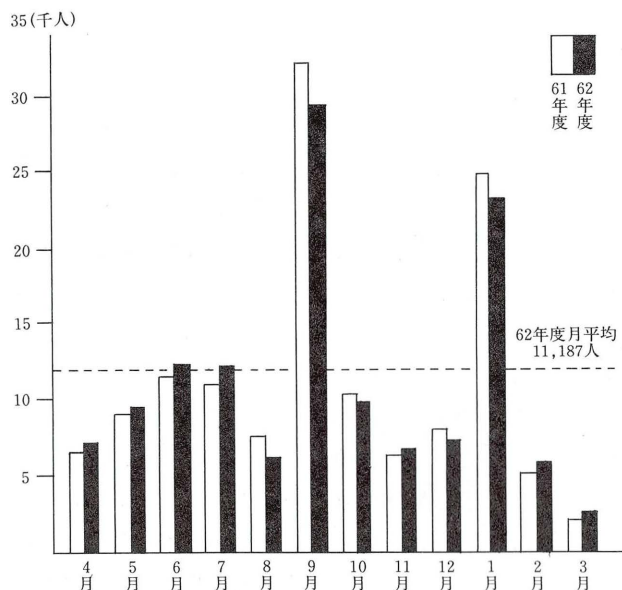
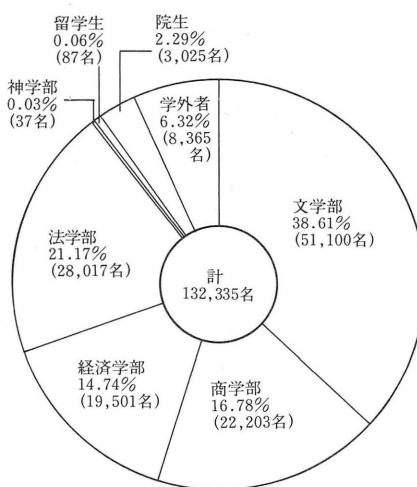
分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
区分	総 記	哲 学	歴 史	社会科学	自然科学	工 学	産 業	芸 術	語 学	文 学	
和 書	650	902	896	4,990	973	510	660	769	509	1,011	11,870
洋 書	618	665	485	3,089	283	65	335	133	804	1,875	8,352
計	1,268	1,567	1,381	8,079	1,256	575	995	902	1,313	2,886	20,222
61年度 和洋合計	1,449	1,782	1,550	8,921	1,002	518	1,266	707	1,308	3,688	22,191

○視聴覚資料

レコード	テープ	マイクロ フィルム	マイクロ フィッシュ	フィルム	スライド	絵 話	フロッピー ディスク	マグネチック テープ	ビデオ テープ	コンパクト ディスク	計
25枚	29リール	361リール	0点	16ミリ 2本	6本	0点	120枚	7点	21リール	0枚	571件

●この2年間にどれだけ利用されたか。

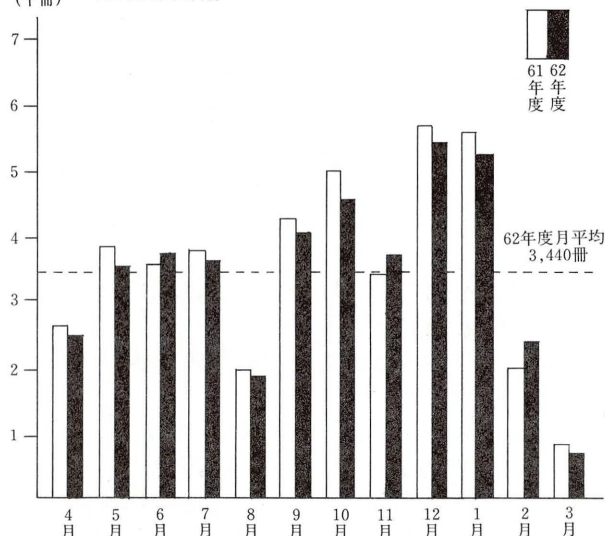
○入館者数 (月別)

○学部別入館者数 (割合)
(教員を除く)

年度	合 計	1 日 平 均
61	140,725人	510人
62	134,239人	485人

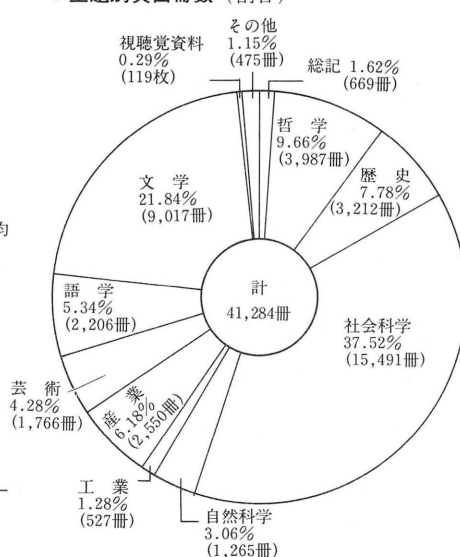
(61年度 開館日数 276日)
(62年度 開館日数 277日)

(千冊) ○ 館外貸出冊数



年度	合 計	1 日平均
61	43,709冊	158冊
62	41,284	149

○ 主題別貸出冊数 (割合)

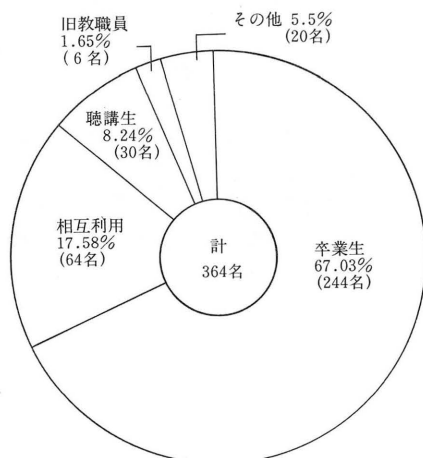


●その他の利用統計

○ 文献複写

利用者区分	種別	電 子 複 写		マイクロフィルムからの引伸		マイクロフィッシュ	
		1,135件	31,123枚	51件	2,134枚	1 件	2 枚
学 内	教員	1,135件	31,123枚	51件	2,134枚	1 件	2 枚
	学生	4,506	44,503	1	2	0	0
学 外		968	17,213	3	42	0	0
合 計		6,609	92,839	55	2,178	1	2

○ 特別利用



(特別利用者364名の内訳)

- 他大学図書館へ本学学生の相互利用希望 34件(43)
- 視聴覚機器貸出 0件(0)
- 学生の図書購入希望 110件(111)
- 投 書 2件(0)
- 紛失弁償図書冊数 14冊(16)
- 閉架図書閲覧件数 3,404件(3,629)
- その内訳
 - 卒業論文 235件(384)
 - 図 書 1,446件(1,612)
 - レコード 139件(94)
 - 新聞・雑誌 1,583件(1,536)
 - 紙 芝 居 0件(3)

※ ()内は61年度

お知らせ

○夏休み長期貸出

7月1日(金)より。

貸出対象は学部学生、専攻科生、大学院生で、冊数は5冊以内(大学院生は20冊まで)。返却期限は9月19日(月)まで。

○夏季休暇中の開館および休館

開館 日曜日を除く毎日9:15~21:00

休館 7月27日(水)、28日(木)は職員夏期修養会のため。

8月13日(土)、15日(月)は夏季特別一斉休暇のため。

1階学習室は休暇中閉室。

○卒業年次生のための特別利用

①貸出

卒論作成のための貸出があります。通常の貸出のほかに3冊以内、1ヶ月間利用することができます。また、修士・博士論文作成のため、通常の貸出のほかに5冊以内、2ヶ月間利用することができます。ともにグリーンの卒論用帯出証で利用します。

②先輩の卒業論文の閲覧

卒論作成の参考に諸先輩の卒論を閲覧することができます。

①、②いずれもゼミ担当教授の承認を得なければなりませんので、希望者はあらかじめ受付に申し出て用紙の交付をうけてください。

☆ 報 告 ☆

〈図書館委員会〉

63. 4. 18 ①. 昭和62年度図書館決算について
 ②. 昭和63年度図書館追加予算の申請について
 ③. 昭和63年度共通研究図書費、一般図書費および新聞雑誌費の配分について

63. 4. 25 ①. 昭和63年度私大助成について

〈研修・出張〉

- 昭和63年度私立大学図書館協会西地区部会九州地区協議会
 63. 4. 21 於：沖縄
 堤事務次長、今永課長出席
 ○昭和63年度九州地区大学図書館協議会総会
 63. 4. 22 於：琉球大学
 堤事務次長、今永課長出席
 ○福岡オンライン研修会
 DIALOG—システム I
 63. 5. 11、12 於：丸善福岡支店
 古庄司書出席
 ○昭和63年度福岡県・佐賀県大学図書館協議会総会
 63. 5. 19 於：佐賀(葉がくれ荘)
 堤事務次長、田代課長補佐出席
 ○第9回EDCセミナー
 63. 6. 2、3 於：北海道大学
 小嶋司書出席
 ○私立大学図書館協会昭和63年度春季西地区部会
 63. 6. 3 於：中京大学(豊田学舎)
 堤事務次長、田代課長補佐出席

編集後記

皆さんが待ちに待った夏休みはもうすぐです。旅行・レジャー・アルバイトといろんな計画を立てておられることでしょう。その計画の中に、ぜひ「読書」も加えて、より充実した夏休みにしていただきたいと思います。図書館は夏休み中も開いています。念のため。(F・T)